

# 向きづけ層

toshi2019

2024 年 10 月 15 日

## 1 局所自由層

### 1.1 局所的な条件について

以後、「層が局所的に同型」という形の条件をよく用いる．これについては次の 2 つの表現がある．

**命題 1.1.**  $F$  と  $G$  を  $X$  上の層とする．次の条件は同値である．

- (i) 各点  $x$  に対し、開近傍  $U$  で  $F|_U \cong G|_U$  となるものが存在する．
- (ii)  $X$  の開被覆  $(U_i)_{i \in I}$  で、各  $i$  に対し  $F|_{U_i} \cong G|_{U_i}$  となるものが存在する．

**証明.** (i) $\Rightarrow$ (ii) :  $X$  の各点  $x$  に対し開近傍  $U_x$  で  $F|_{U_x} \cong G|_{U_x}$  となるものが存在する． $(U_x)_{x \in X}$  は  $X$  の開被覆である．

(ii) $\Rightarrow$ (i) :  $(U_i)_{i \in I}$  を  $X$  の開被覆で各  $U_i$  に対し  $F|_{U_i} \cong G|_{U_i}$  となるものとする． $x \in X$  とすると  $x \in U_i$  となる  $i \in I$  が存在する．  $\square$

### 1.2 局所自由層

$X$  を局所コンパクト空間とする． $\mathcal{A}$  を  $X$  上の環とする．まず、局所自由層を定義しよう．

**定義 1.2** (局所自由層).  $k \geq 0$  を整数とし、 $\mathcal{L}$  を  $\mathcal{A}$  加群とする． $X$  の開被覆  $X = \bigcup_{i \in I} U_i$  で、どの  $i \in I$  に対しても  $\mathcal{L}|_{U_i} \cong \mathcal{A}|_{U_i}^{\oplus k}$  となるものが存在するとき、 $\mathcal{L}$  は階数  $k$  の局所自由層 (locally free sheaf) であるという．階数 1 の局所自由層のことを可逆層 (invertible sheaf) とよぶ．

1.1 節のことはを用いると、 $\mathcal{L}$  が局所自由層であるとは、 $\mathcal{L}$  が局所的に  $\mathcal{A}^{\oplus k}$  と同型であるということである．

$\mathbf{k}$  を大域次元が有限な環とする． $\mathcal{A} = \mathbf{k}_X$  のとき、局所自由層は局所定数層である．可逆層は局所的に  $\mathbf{k}_X$  と同型な層である．

$L \in \text{Mod}(\mathbf{k}_X)$  とする． $L^{\otimes -1} := \text{R}\mathcal{H}om_{\mathbf{k}_X}(L, \mathbf{k}_X)$  とおく． $\mathbf{k}$  が体ならば、 $\mathbf{k}_X$  は入射的なので、 $\text{R}\mathcal{H}om_{\mathbf{k}_X}(L, \mathbf{k}_X) = \mathcal{H}om_{\mathbf{k}_X}(L, \mathbf{k}_X)$  が成り立つ．

## 2 向きづけ層

### 2.1 対合律

$A_X$  を  $A$  をファイバーとする定数層とする.

$$D'F := R\mathcal{H}om_{A_X}(F, A_X)$$

とおく. 次の公式が成り立つ.

**定理 2.1** ([KS90, 演習 III.3]).  $X$  を位相空間とする.  $F$  を  $\mathbb{Z}_X$  と局所的に同型な層とする. このとき, 次の同型がある.

$$F \otimes F \cong \mathbb{Z}_X, \quad D'_X F \cong F.$$

このノートだけの用語で定理 2.1 を  $F$  の対合律 (involution law) とよぶことにする.

証明にあたり, 次の事実注意到しよう.

**補題 2.2.**  $\varphi: \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}$  をアーベル群の同型とする. このとき  $\varphi$  は  $\pm \text{id}_{\mathbb{Z}}$  のどちらか一方である.

**証明.**  $\varphi(1) = m$  とおくと任意の整数  $n$  に対し  $\varphi(n) = n\varphi(1) = nm$  となるので,  $\mathbb{Z}$  から  $\mathbb{Z}$  への射は  $m$  倍写像である.  $\psi: \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}$  を  $\varphi$  の逆射とすると

$$1 = \psi(\varphi(1)) = \psi(m) = m\psi(1)$$

となる.  $\mathbb{Z}$  の可逆元は  $\pm 1$  のみであるから,

$$m = \pm 1, \quad \psi(1) = \pm 1 \quad (\text{複合同順})$$

である. □

**定理 2.1** の証明 1 つ目の主張を示す.  $X$  の開被覆  $(U_i)_{i \in I}$  と各  $U_i$  上の層の射

$$\theta_i: F|_{U_i} \xrightarrow{\sim} \mathbb{Z}_X|_{U_i}$$

で同型であるものが存在する. 補題 2.2 より, この  $(\theta_i)_i$  は各  $i$  に対し  $\theta_i = \pm 1$  とかける. 実際,  $x \in U_i$  とすると,  $s_x \in F_x \cong \mathbb{Z}$  に対し  $(\theta_i)_x(s_x) = \pm s_x$  となる. したがって, 各  $i, j$  に対して

$$\begin{aligned} \theta_i \otimes \theta_j|_{U_i \cap U_j} &\cong (\pm 1) \otimes (\pm 1) \\ &\cong 1 \\ &\cong \theta_j \otimes \theta_i|_{U_i \cap U_j} \end{aligned}$$

となるので  $(\theta_i \otimes \theta_j)_i$  から層の射

$$\theta \otimes \theta: F \otimes F \rightarrow \mathbb{Z}_X \otimes \mathbb{Z}_X$$

がひきおこされる. これと同型

$$\mathbb{Z}_X \otimes \mathbb{Z}_X \rightarrow \mathbb{Z}_X$$

の合成を  $\varphi$  で表す. 各点  $x \in X$  に対して

$$\varphi_x: F_x \otimes F_x \xrightarrow{\sim} \mathbb{Z} \otimes \mathbb{Z} \cong (\mathbb{Z}_X)_x$$

が成り立つので,  $\varphi$  は同型である.

1 つ目の主張から 2 つ目の主張が従うことを示す. 随伴  $(\otimes, \mathcal{H}om)$  から

$$\mathrm{Hom}_{\mathbb{Z}_X}(F \otimes F, \mathbb{Z}_X) \cong \mathrm{Hom}_{\mathbb{Z}_X}(F, \mathcal{H}om_{\mathbb{Z}_X}(F, \mathbb{Z}_X))$$

である. 同型は同型に送られるので同型  $F \otimes F \rightarrow \mathbb{Z}_X$  は同型  $F \rightarrow \mathcal{H}om_{\mathbb{Z}_X}(F, \mathbb{Z}_X) = D'F$  に送られる.  $\square$

定理 2.1 によると,  $\mathbb{Z}_X$  上の可逆層は対合律をみたす.

## 2.2 向きづけ層

$A$  を可換環とし  $A_X$  で  $A$  をファイバーとする定数層とする.  $\mathrm{or}_X^{\mathbb{Z}}$  で  $\mathbb{Z}$  上の向きづけ層,  $\mathrm{or}_X$  で  $A$  上の向きづけ層を表す.  $\mathrm{or}_X \cong \mathrm{or}_X^{\mathbb{Z}} \otimes A_X$  である.

$\mathrm{or}_X$  も対合律をみたす.

**命題 2.3** ([KS90, 命題 3.3.4]).  $f: Y \rightarrow X$  をファイバー次元が  $l$  の位相的しずめ込みとする.

- (i)  $\omega_{Y/X}^{\mathbb{Z}} \in D^+(\mathbf{Z}_Y)$  と  $\mathrm{or}_{Y/X}^{\mathbb{Z}} \in \mathrm{Mod}(\mathbf{Z}_Y)$  を  $\mathbf{Z}$  上の双対化複体と向きづけ層とすると, 次の同型が成り立つ.

$$\omega_{Y/X} \cong A_Y \otimes_{\mathbf{Z}_Y} \omega_{Y/X}^{\mathbb{Z}}, \quad \mathrm{or}_{Y/X} \cong A_Y \otimes_{\mathbf{Z}_Y} \mathrm{or}_{Y/X}^{\mathbb{Z}}.$$

- (ii) 次の自然な同型が成り立つ.

$$\begin{aligned} \mathrm{or}_{Y/X} \otimes \mathrm{or}_{Y/X} &\cong A_Y, \\ \mathcal{H}om(\mathrm{or}_{Y/X}, A_Y) &\cong A_Y. \end{aligned}$$

- (iii)  $g: Z \rightarrow Y$  を連続写像で  $f \circ g$  がファイバー次元  $m$  の位相的しずめ込みになるものとする.  $F \in D^+(A_X)$  に対して,

$$g^! \circ f^{-1} F \cong (f \circ g)^{-1} F \otimes \mathrm{or}_{Z/X} \otimes g^{-1} \mathrm{or}_{Y/X}[m-l]$$

が成り立つ.

$$\mathrm{or}_{Y/X} \otimes \mathrm{or}_{Y/X} \cong \left( \mathrm{or}_{Y/X}^{\mathbb{Z}} \otimes \mathrm{or}_{Y/X}^{\mathbb{Z}} \right) \otimes A_Y \cong \mathbf{Z}_Y \otimes A_Y \cong A_Y$$

である.

■うめこみについて 以降,  $A = \mathbf{C}$  とし  $\mathbf{C}$  上の向きづけ層を考える.  $i: M \hookrightarrow X$  を閉埋め込みとし,  $a_M: M \rightarrow \{\text{pt}\}$  と  $a_X: X \rightarrow \{\text{pt}\}$  を一点への射とすると

$$\begin{aligned}
\text{or}_{M/X}[-n] &\cong \omega_{M/X} \cong i^! \mathbf{C}_X \\
&\cong i^! a_X^{-1} \mathbf{C} \\
&\cong (a_X \circ i)^{-1} \mathbf{C} \otimes_{\mathbf{C}_M} \text{or}_M \otimes_{\mathbf{C}_M} i^{-1} \text{or}_X[n-2n] \\
&\cong a_M^{-1} \mathbf{C} \otimes_{\mathbf{C}_M} \text{or}_M \otimes_{\mathbf{C}_M} i^{-1} \text{or}_X[-n] \\
&\cong \mathbf{C}_M \otimes_{\mathbf{C}_M} \text{or}_M \otimes_{\mathbf{C}_M} i^{-1} \text{or}_X[-n] \\
&\cong \text{or}_M \otimes_{\mathbf{C}_M} i^{-1} \text{or}_X[-n]
\end{aligned}$$

が成り立つ.  $\omega_{M/X} \cong \text{or}_{M/X}[-n]$  なので,

$$\text{or}_{M/X} \cong \text{or}_M \otimes_{\mathbf{C}_M} i^{-1} \text{or}_X \quad (2.1)$$

である.  $X$  上の層  $\text{or}_X$  と制限  $\text{or}_X|_M = i^{-1} \text{or}_X$  を  $M$  上で同一視すると, 上の式は

$$\text{or}_{M/X} \cong \text{or}_M \otimes \text{or}_X \quad (2.2)$$

とも書ける. ([KS90, p.130] の記法.)

### 3 超関数

$$\text{R}\Gamma_M(\mathcal{O}_X) \otimes \text{or}_M[n] \cong \text{R}\mathcal{H}om_{\mathbf{C}_X}(D'_M \mathbf{C}_{XM}, \mathcal{O}_X). \quad (3.1)$$

証明. まず  $D'_M \mathbf{C}_{XM} \cong \text{or}_M[-n]$  より, 右辺は

$$\text{R}\mathcal{H}om_{\mathbf{C}_X}(D'_M \mathbf{C}_{XM}, \mathcal{O}_X) \cong \text{R}\mathcal{H}om_{\mathbf{C}_X}(\text{or}_M, \mathcal{O}_X)[n]$$

である. 一方左辺は

$$\text{R}\Gamma_M(\mathcal{O}_X) \otimes \text{or}_M \cong \text{R}\mathcal{H}om(\mathbf{C}_{XM}, \mathcal{O}_X) \otimes \text{or}_M$$

である. よって (3.1) が成り立つのは

$$\text{R}\mathcal{H}om(\mathbf{C}_{XM}, \mathcal{O}_X) \otimes \text{or}_M \cong \text{R}\mathcal{H}om_{\mathbf{C}_X}(\text{or}_M, \mathcal{O}_X) \quad (*)$$

となるときである. □

■質問について 可逆層で同型が  $\pm 1$  なので,  $\text{or}_M \cong \text{or}_M^{\otimes -1}$

(\*) は

$$\text{R}\mathcal{H}om_{\mathbf{C}_X}(\text{or}_M^{\otimes -1}, \mathcal{O}_X) \rightarrow \text{R}\mathcal{H}om(\mathbf{C}_{XM}, \mathcal{O}_X) \otimes \text{or}_M$$

右は

$$\begin{aligned}
\mathrm{R}\mathcal{H}om(\mathbf{C}_{X/M}, \mathcal{O}_X) \otimes_{\mathrm{or}_M} &\rightarrow \mathrm{R}\mathcal{H}om(\mathbf{C}_{X/M}, \mathcal{O}_X \otimes \mathrm{or}_M^{\otimes -1}) \\
&\rightarrow \mathrm{R}\mathcal{H}om(\mathbf{C}_{X/M}, \mathrm{R}\mathcal{H}om(\mathrm{or}_M, \mathcal{O}_X)) \\
&\cong \mathrm{R}\mathcal{H}om(\mathbf{C}_{X/M} \otimes \mathrm{or}_M^{\otimes -1}, \mathcal{O}_X)
\end{aligned}$$

## 参考文献

- [KS90] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Sheaves on Manifolds*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 292, Springer, 1990.
- [Sch04] Pierre Schapira, *Sheaves: from Leray to Grothendieck and Sato*, Séminaires et Congrès 9, Soc. Math. France, pp.173–181, 2004.